
たいくつな恋

あさか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たいくつな恋

【Nコード】

N0347F

【作者名】

あさか

【あらすじ】

結婚を控えるOLの葵は、平凡な恋人、日常に不満を抱いていたある日、運命的な出会いが訪れた。
美形で年下、何もかもが婚約者よりも優れている理想の彼に惹かれ、翻弄される。

1 退屈

女は愛される生きもので、男は愛する生きもの。

女は思われたほうが幸せなんて、誰が決めたのだろう。

ちよつとイマイチ。

ピンとこない。

ときめかない。

不満は数えたらキリがない。

でも、こんなにも自分を大切にしてくれる男性は、他にいないはず。

女は、魅力的な異性を追いかけて叶わない恋にボロボロになるよりも、自分を思ってくれて浮気される心配のない人と安定したほうがいいなんて、くだらない。

女に生まれた時点で、恋を諦めなければいけないなんて。

思われるだけの人生なんて。

魅力的な異性を追いかけられる男に嫉妬しながら、ぬるま湯のような恋に浸かっている。

たいくつな恋。

女である自分は、気づいたらそんな恋に十年以上も時間を費やしていた。

思われることに、甘やかされることに慣れてしまって、傷つくような度胸は今更ない。

冒険できるような年齢でもない。

自分を男がもてはやすのも、あとの少しの期間だけ。

いずれこんなボヤキさえ、わがままだと言われる日が来るのだ。

女は二十代で結婚できなければ行き遅れだなんて、誰が言い出したのだろう。

女を飾りものとは思っていない男だ。

分かっているのに、振り回される自分も相当に愚かだ。

恋とも呼べない恋の中で、一生を終えたくない。

このまま一生本気の恋をしないで、ぬるま湯の中で年を取っていくのだろうと思うと、ぞっとする。

でも自分には、這い上がるような体力はない。

たいくつだ。

本当にたいくつだ。

それでも最初は幸せな、恋だった。

特別な出来事もトキメキもなく、毎日、毎週、毎年同じことの繰り返し。

同じ場所、同じ言葉、同じ目線、ずっと変わらないことが安定だと思っていた。

平凡だけれども、満たされているはずだった。

どこかで、たいくつだと感じていたことは否めないけれど、穏やかな日々に満足しているはずだった。

本気の恋に落ちるまでは。

出会いは、仕組まれた運命だった。

今から十年以上も昔の話になる。

あおい
葵が高一の四月に出会った。

最初に話し掛けたのは葵だったか、彼だったか。

席が近いことがきっかけで葵たちは毎日言葉を交わすようになり、夏休みになる前に、終業式後の教室で彼から告白された。

生まれて初めて男性から告白された葵は、驚いたことを今でもよく覚えている。

「考えさせて」

そう答えると、葵は動揺して教室を飛び出して、廊下を早歩きで駆け抜け階段を下りて一階の昇降口にまで足を運んでいた。

彼のことは、嫌いではない。

毎日話していて楽しいし、彼と話せると思うと朝起きることもつらくない。

これは、好きということではないのだろうか。

初めて葵は自分の気持ちに気がつくとき、身を翻して下駄箱から廊下へ、廊下から階段へと来た道を戻る。

教室に戻るとまだ、彼はいた。

葵が突然戻ってきたから、驚いたような顔をしている。

彼の目の前に葵は歩み寄ると微笑む。

「考えてきた」

彼の顔に緊張が走る。

葵にも伝染して、心臓が一際強く打つ。

「私も、好き。こちらこそよろしく」

彼は眩しく爽やかな笑顔を見せると、葵の手を取った。

彼の日に焼けた肌と白い歯のコントラストが眩しくて、わけもなく照れくさかったのを今でも覚えている。

葵たちは、付き合い出した。

お互いにとつて初めての恋人だったので、何をするにも初めてで新鮮の連続だった。

夏休みは一緒にあちこちに遊びに行つて、二学期が始まってテストが近づいたら一緒に勉強した。

初めてのキスは学園祭で、ドラマや小説で見るようなムードのあるものではなくて、お互い緊張して震えてしまい、終わったら二人で顔を見合せて大笑いした。

二年に進級して、再び同じクラスになれたことを喜んだ。

クラス発表の掲示板の前で、あまりに彼が喜ぶので葵は落ち着か

せることで精一杯だった。

二年の夏休みに初めて彼と遠出をして、初めて結ばれたのも、そのときだ。

噂に聞いていた通り、痛いだけだったけれどなぜか嬉しい記憶が残っている。

葵と彼は高校を卒業したら、東京の大学を希望していた。

同じ大学に行けたらいいと思っていたが、彼も同じように思っていてくれた事が嬉しくて、受験期間は会うことを自粛して勉強に取り組んだ。

結果葵は都内の大学に合格する。

一方彼は、大学には不合格だったが都内の広告代理店に就職したのだった。

『同棲は大学を卒業してから』

葵の両親が強く何度も言うので、別々のところで暮らしながら大学に通い、葵たちは付き合うことになる。

学校が変わると、お互いの環境の違いからすれ違いが増えるかもしれないと思ったが杞憂で、葵たちは高校生のときと同じように楽しく過ごした。

平日は電話とメールで連絡をして、休日は会って遊びに出かけたり部屋で過ごしたりする。

日曜の夜になると葵の部屋まで彼が送ってくれる。

「じゃあ、また来週会おうね」

決まって彼はそう言って葵に口づけをする。

一秒くらいの短い口づけだ。

部屋に戻って葵がメイクを落として、シャワーを浴び終えてくつろいでいると、彼から着信がある。

『今帰ったよ。今日は楽しかったね』

微笑みながら葵は電話に答える。

お互い明日も朝早いので、適当に話を終えると電話を切るのだ
た。

大学に入って幾度となく繰り返していて、特に大きな事件や出来
事もなく、平穩だった。

時々喧嘩をすることもあるけれど、時間がもったいないのですぐ
に仲直りする。

二人の気性が穏やかで大雑把なところも関係していたのかもしれ
ない。

ときは過ぎて葵も大学を卒業すると、都内にある大手の商社に入
社した。

理由もなく総合職を希望していたのだけれど、このご時世どこも
厳しいらしく一般での採用となる。

「結婚して少ししたら辞めるんだから、一般でもいいじゃん」
彼の呑気な様子を見ると、気にする必要もないと思えてしま
うから不思議だ。

元から強いこだわりがあつたわけでもなく、考えてみたら一般で
も問題はない。

就職して二年が過ぎ、仕事にも職場にも慣れて毎日が充実してい
た。

大学を卒業してから同棲する予定だったが、きっかけが掴めず先
延ばしになっている。

漠然と二人は、結婚したら一緒に暮らそうと考えていたのだ。

葵の高校から現在までを、あえて説明するならばこのくらいだろ
うか。

原稿用紙にしてほんの数枚だろう。

平穩で、毎日、毎週、毎年同じことの繰り返しだった。

葵の人生を話すと、人はたいくつだと思っだろう。

どこかで見たような、聞いたような出来事、それにも満たない平凡な出来事を繰り返しているだけだ。

葵はそれでも幸せだった。

彼を見ていると今でも出会った頃を思い出す。

ずっと同じだから、ずっと新鮮なままでいられる。

葵は出会ったときからずっと彼に恋している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0347f/>

たいくつな恋

2010年10月11日00時27分発行